貸本マンガと戦後の風景

高野慎三

論創社

はじめに

六人のメンバーで貸本マンガ史研究会を発足させたのは、一九九九年である。翌年の六月一五日に創刊号が発刊された。平均七〇～八〇ページにすぎない小冊子ではあるが、今日までの一六年のあいだに二六冊ほどが出たことになる。

創刊号の巻頭に掲げた「創刊にあたって」の内容の一部を紹介しておきたい。

「貸本マンガという存在は、この国の戦後マンガ史の流れの中では、それほど長大な命脈を保ったとはいえない。その実体的な精査はこれからの課題である部分が多いが、どんなにゆるやかな定義を当てはめたところで、貸本マンガの全盛期はせいぜい五～六年に過ぎず、存続した全期間を通じても、二〇年前後で役割を終えたという境涯をもっている」「しかし、出自としてはマンガという有力な大衆文化の中では下位の枝葉であったはずの貸本マンガが、じつは現代に続くマンガ文化そのものを主導してきた事実を忘れてはならないだろう」「いささかの自負をこめていえば、貸本マンガの全容を戦後史的な視角で記録し分析し、将来的には体型的な貸本マンガ史をかきあげるということになろうか」（文責・梶井純）

わたしたちは会としての方向性をこのように明らかにした。

さて、貸本マンガにそれほど拘る必要があるのか、という問いに対しては、「ある」と応えるしか

ない。大衆文化として、あるいはサブカルチャーとして、戦後の映画、演劇、音楽、デザインをふくめた諸々が対象となり、その都度おおいに論じられてきた。しかし、それらにくらべると貸本マンガは大衆文化、サブカルチャーとしての存在がやや希薄であった。

いうまでもなく、それは貸本マンガの寿命が一五年から二〇年という短い期間であったことに要因があるのだろう。しかし、貸本屋は全国津々浦々に存在したはずである。田畑が広がる農村にも、峠を越えた山あいの村にも、小さな小さな漁村にも存在した。五〇年代の最盛期にあって、貸本屋は全国で二万数千軒ほどが数えあげられるのではないかと類推されるが、その事実は、新刊書店で本を手にすることのできなかった人々の数を意味するだろう。

いやたしかに、六〇年を境に貸本業界は衰退の一途をたどっていった。貸本屋むけのマンガの新刊は七〇年近くにはもうほとんどみられなくなった。それでも、都内にも、そして山あいにも七〇年を過ぎても貸本屋は存在した。新宿の裏町のあちこちに、信州の山のなかに、瀬戸内の漁村にである。「一億総中流」「贅沢はステキだ」とマスコミによって高度資本主義の達成が謳歌されていてもである。

もしかすると、わたしたちをも含めて、戦後の現実をそれほど深くは理解していなかったのかもしれない。貸本マンガを読み続けながらそのように思ったのである。良識派を自認するマスコミは五〇年代後半から繰り返し、貸本マンガを「悪書」と弾劾し、追放キャンペーンを張った。しかし、そのころの貸本マンガの読者の中心は、小中学生などではなく、義務教育を終えた年少の若者が圧倒的であった。

貸本マンガのなかのアクションものや少女ものを一瞥すれば、読者の実存までが把握できたはずで

ある。にもかかわらず、大手マスコミは「悪書追放」に熱を上げ続けた。それは、貸本マンガといえども「良い子のマンガ」であらねばならない、という良識にもとづくのだろう。だが、わたしたちはそうした視点を拒否したい。

わたしたちは、二〇〇六年にそれまでの「研究成果」をまとめるものとして『貸本マンガRETURNS』を出版した。本書は、いわばその姉妹篇といってもいい。本書の内容は、『貸本マンガ史研究』のなかから紡ぎ出されたものであり、わたし個人の著書であるよりも、メンバー六人の共同作業の成果という性格をもつ。

高野　慎三

貸本マンガと戦後の風景◉目次

はじめに　3

1章　貸本マンガの誕生まで

夜店の赤本と『三振王』　14
「おもちゃマンガ」と手塚の赤本単行本　19
街頭紙芝居と太平洋文庫　25
紙芝居、赤本から貸本マンガへ　30

2章　貸本マンガの隆盛

花売り娘と貸本少女マンガ　36
五〇年代の復讐譚――『坊太郎天狗』　42
滝田ゆうの社会派少女マンガ　47
白土三平『こがらし剣士』と戦後状況1　52
白土三平『こがらし剣士』と戦後状況2　57
貸本屋探索行と『バレエ』　62
戦記マンガの読者とは　68
『影』『街』の創刊　75
『少年山河』に描かれた〝怒れる若者たち〟　81
五〇年代のユーモアの諸相　87

3章　貸本マンガ・一九六〇

三茶書房と『忍者武芸帳』との出会い　94
貸本ＳＦと戦記マンガの同時代性　100
荏原地区の零細工場群と東京作画会　106
つげ忠男の幻のデビュー作　112
つげ義春『忍者秘帳』と安保論争の頃　117
戦災孤児とつげ忠男の少女マンガ　122
漁村の貸本屋と『少年　近藤勇』　127

4章　貸本マンガ　衰退期の光芒

中目黒の工場群と『轟先生』　134

『刑事』とさいとう・たかを評価をめぐって　140
小島剛夕の世界　145
『血だるま剣法』の問題性　149
面影橋の佐藤プロと水木しげる　154
渋谷・大盛堂と『忍法秘話』　159
つげ忠男と〝ハイティーンの怒り〟　165
つげ忠男の疾風怒濤時代　170
二人の貸本作家——池上遼一とつげ義春　174

5章　貸本マンガと新宿・十二社と

十二社の料亭街とつげ義春『戦雲のかなた』　180
新宿・成子坂下の『ロケットマン』　186
石子順造と杉村篤（コン・太郎）　191

石子順造の貸本屋巡礼　197
石子順造と「貸出票」　203

6章　貸本マンガと戦後大衆文化

高橋真琴と少女小説　210
任侠映画と佐藤まさあきの劇画　216
貸本時代小説と小島剛夕　222
映画の隆盛と貸本現代小説　228
無名の貸本作家　233
『旗本退屈男』と少年講談の隆盛　238
抵抗の系譜が問いかけるもの　243

7章　貸本マンガの「場所」

貸出票が物語るもの　250
下層の人びとと貸本屋　255
奥付とその痕跡を尋ねて　260
神田村とつげ義春『奴隷侍』　265
『全国貸本新聞』の先駆性　269
太平洋文庫にみる戦後現実　275
水木しげるの肉声――「読者投稿欄」　280
おわりに　285
解説　梶井　純　288

装幀・組版／シナプス

1章

貸本マンガの誕生まで

夜店の赤本と『三振王』

私が疎開先の埼玉から都内に戻ったのは一九四九年である。敗戦直後からもしばしば都内に出てきていたので、いわゆる焼け跡の風景は印象強く記憶された。しかし後年、「見渡す限り一面の焼け野原」という記述などに接すると、「そうでもなかったなあ」と思ったりもした。たしかに、どこもかしこも焼け跡だらけだったのだが、戦災を免れた地区も意外に多く存在したからだ。

敗戦の翌年、隅田川沿いの四階建ての病院の屋上から下町全域を見渡したことがある。隅田川の対岸に巨大な建物が望まれた。その建物はかつての国技館で、敗戦間際には米本土攻撃のための風船爆弾の工場だった。戦後、アメリカ軍に接収されメモリアルホールと改名されていた。この旧国技館をのぞくと、周りの浅草、両国、本所あたりはたしかに「焼け野原」の様相を呈していたが、それでも二階建てや三階建てのビルなどがいくつか認められ、なぜかホッとしたのを憶えている。

さて、浅草、上野、神保町、銀座へと頻繁に出かけるようになったのは、焼け跡が目立たなくなった五〇年前後からだ。闇市の姿も消えつつあり、闇市にかわって繁華街の歩道には夜店が毎日のように軒を並べた。銀座や渋谷や上野の夜店では、古本屋をいつも目撃した。夜店の古本といっても単行本は少なく、ほとんどが雑誌類だった。カストリ雑誌や講談雑誌が雑然と重ねられていたが、そのな

かでは子ども向けの赤本マンガも多くを占めていた。

赤本マンガについては梶井純の『戦後の貸本文化』（東考社、七九年）に詳しい。当書には敗戦後の一時期に赤本マンガブームといったものが現出したとある。そして、「赤本マンガの実態については、これまでそれほどくわしくわかっていない。しかしながら、たまたまいささかでも貸本店にかかわりのある存在であったばかりでなく、後年の一九五〇～六〇年代前半において貸本店で圧倒的な位置を占めた貸本マンガがもっていたものと同質の思想性をもっていたという意味では無視することのできない存在であった」と記されたごとく、赤本マンガは、貸本マンガの前段階を意味したものといえるだろう。

ただ、五〇年前後になんども貸本屋に出入りしたことはあるのだが、店内に赤本を見た記憶がない。絵本や赤本よりもう少し造りが上等のマンガや少年向けの講談本等の読みもの、名作全集や江戸川乱歩やコナン・ドイルの探偵もの、等々が棚を占有していたが、赤本はなかった。むしろ赤本マンガは、銀座や渋谷の夜店で接することがほとんどだった。新刊書店や古本屋で見かけることのない赤本マンガは、とても新鮮にみえたから夜店をのぞくたびに購入していたような気がする。もしかすると、それは都内だけの現象で、地方の新刊書店や貸本屋には赤本マンガが流通していたのかもしれない。

赤本マンガが流通していた時期、「六三制　野球ばかりが強くなり」などと揶揄されたほど、小中学生のあいだでは野球熱がすごかった。それは現在のサッカー熱以上の勢いであった。物資の少ない時代であったからグローブもミットもすべて手造りの布製だ。当然、ユニホームなどという代物は望めないから、白シャツに好きなプロ野球球団のローマ字を縫い付けたりしていた。ともかく、空き地

があればどこでも野球が始まった。

まだまだ焼け跡はいくらでも残っていたので、一塁と三塁とホームだけの三角ベース試合はいつでも可能だった。近くの工場の焼け跡には毎年のようにどさ回りの大衆演劇がやってきた。その芝居小屋の裏が三角ベースに最適だったので、公演が始まる前の夕方まで役者の青年たちと試合をやった。彼らは野球を終えると、三度笠の股旅姿や化け猫姿に着替え、公演直前まで一緒になって野球談義や映画談義を楽しんだ。私たち子どもは、木戸銭を払うと芝居小屋の中で、先の青年たちとの会話も忘れて、股旅ものの物語に感涙し、小屋内を暴れまくる化け猫に恐怖していたのである。

そうした野球漬け時代だからマンガも野球ものが多く存在した。赤本の『三振王』（子供のエホン社）を購入したのが上野の夜店であったのか渋谷の夜店であったのかは忘れたけれど、夜店の古本であったのは間違いない。このマンガの作者である入江しげるは、赤本マンガのあと貸本マンガを手がけ、さらに五〇年代後半から六〇年代にかけて大手出版社で少女マンガ家として活躍した。代表作は『少女ブック』に連載していた「すみれさん」であるが、ほかに『少女クラブ』にも作品を発表していたようで、上田としこと並ぶほどの人気マンガ家だった。二〇一一年に八四歳で他界したとのこと

『三振王』（子供のエホン社）

だ。

『三振王』は六〇ページの作品だが、とくべつ傑出した筋立てではない。冒頭に「ぼくたちがチームをつくったのは、プロ野球がぼくたちのまちにきてからだ。ともだちのだれもかれもが、やきゅうねつにさかんで、なにかというとやきゅうのはなしでもてていた」とある。主人公の少年はいつも三振ばかりでチームに迷惑をかけている。だが、最後の最後にホームランをかっ飛ばし仲間から喜ばれる、といった単純なストーリーだ。

画像自体も戦前からよくみかけられた技法を踏襲しているが、その素朴ともいえるタッチはじつに見やすい。ともかく全体にユーモアが横溢していて、三振王の失敗の連続が見せどころであるといってよい。読者である私たちはページを繰るごとに爆笑していたのである。まさにそれは「戦後的風景」の一場面であるだろう。焼け跡に建てたバラック同然の狭い家で私たちは、たしかに大いに笑っていた。『三振王』は一九四九年の発行であるが、翌年には朝鮮戦争が開始された。ユーモアマンガに大笑いしながらも、都内を走る米軍戦車の車列に関心をもたざるを得なくなっていた。

ところで、じつはこの本は表紙と裏表紙が墨で黒く塗りつぶされている。マンガを買っても

『三振王』

らえないクラスメートに頼まれて貸したのはいいが、なかなか返却されない。彼の家にも行ったのだが本人は勉強中とのことで、玄関先に出た母親に返却を訴えると「はじめからこうだったそうよ」と墨塗りの本を手渡された。見返しに自分の名前を書いておいたが、その部分も墨を塗られていた。もう一冊の手塚治虫のマンガは、その母親が「借りていないそうですから」と言い切った。私は黙って帰った。

［著者］
高野慎三（たかの・しんぞう）
1940 年、東京都生まれ。ペンネームは権藤晋（ごんどうすすむ）。書評紙編集者、青林堂の『ガロ』編集者を経て、北冬書房代表。マンガのほか、映画、旧街道、宿場探索。おもな著作に『「ねじ式」夜話』（喇嘛舎）、『ガロを築いた人々』（ほるぷ出版）、『つげ義春幻想紀行』（立風書房）、『旧街道』（北冬書房）、『郷愁』（北冬書房）、共著に『現代漫画論集』（青林堂）、『劇画の思想』（太平出版社）、『つげ義春漫画術』（ワイズ出版）、『加藤泰の映画世界』（北冬書房）、『貸本マンガ RETURNS』（ポプラ社）などがある。貸本マンガ史研究会会員。

貸本マンガと戦後の風景

2016 年 11 月 10 日　初版第 1 刷印刷
2016 年 11 月 20 日　初版第 1 刷発行
著　者　高野慎三
発行者　森下紀夫
発行所　論創社
東京都千代田区神田神保町 2-23　北井ビル
電話 03（3264）5254　振替口座 00160-1-155266
印刷・製本　中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1577-0　©2016 TAKANO Shinzo, printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします